

後期古英語期におけるヴァイキングの名称

社会に呼応する名前とその機能

小河舜

本稿は、10世紀末から11世紀初頭にかけてイングランドへの攻撃、侵略を繰り返した北欧からのヴァイキングが、古英語文献においてどのように言及されているか、またその言及の仕方によどのような機能や意図が見られるか、という問題について、当時の代表的な散文作家 Ælfric (c. 950–c. 1010) と Wulfstan (d. 1023) の作品を対象に考察するものである。8世紀後半から断続的に繰り返されたヴァイキングによるイングランドへの攻撃や侵略は、10世紀末～11世紀初頭にかけて最も激化し、その侵略は1016年のCnutのイングランド王戴冠に頂点を見ることができると言える。このような社会情勢に活躍した Ælfric と Wulfstan は、当時彼らが抱えていた社会・政治的状况にうまく適応する形で北欧からの侵略者や北欧に関わりのある人々への言及の仕方を選んでいるように思われる。

1. Ælfric 作品に見られるヴァイキングへの言及

聖職者、散文作家である Ælfric は、Winchester で教育を受け、その後 Dorset の Carne Abbas で 1005 年まで修道士として生活し、1005 年以降 Oxford にある Eynsham の修道院長として活躍する。Ælfric の活動地域は、イングランド北部や東部沿岸部のようにヴァイキングの攻撃から直接的な影響を強く受けた地域ではない。しかし、992 年頃に執筆された *Catholic Homilies* の second series に付された序文にヴァイキングの侵略に言及する一節が見られることから、国家を大きく揺るがすヴァイキングの攻撃や侵略が、Ælfric の執筆活動に少なからず影響を与えていたことが窺える。実際、Carne Abbas で執筆された Ælfric の代表作、*Catholic Homilies* と *Lives of Saints* には、ヴァイキングや彼らの攻撃、侵略に関する記述が随所で見られる。

Ælfric によるヴァイキングへの言及に関して注目すべきは、ほとんどすべての箇所、民族名を使用した直接的な言及が避けられている点である。この点は、海からの侵略者を頻りに Danish と形容する *Anglo-Saxon Chronicle* とは対照的な点である。この特徴は、例えば *Lives of Saints* に収録された *The Forty Soldiers* に確認することができる。ここでヴァイキングへの言及は、聖人伝の終盤に見られ、ヴァイキングは þa hæðenan “the heathens” と表現される。本箇所が材源をもとに執筆された聖人伝のエピソードではなく、Ælfric 自身による執筆箇所であること、そして通常過去形で語られる聖人伝の中で、現在形が一貫して使われていることを考慮すると、この一節が当時の社会情勢に言及するものとして意図された箇所であることが読み取れる。*Lives of Saints* では、ヴァイキングが直接的に言及される例が唯一 *Life of St Edmund* に確認することができるが、ここで Ælfric は、ヴァイキングによる Edmund 殺害に至る経緯を過去形で述べており、あくまで過去の歴史的記述としてこの一節を示している点が特徴的である。

以上のように、Ælfric の *Lives of Saints* や *Catholic Homilies* では、ヴァイキングや彼らの行動への言及が多く見られるが、その一方で、その言及の仕方がいずれも間接的、婉曲的である点が Ælfric のヴァイキングへの言及に見られる特徴といえる。そして、このような間接的なヴァイキングへの言及には、当時 Ælfric が抱えていた社会・政治的背景が大きく影響していると考えられる。Ælfric は、*Lives of Saints* や *Catholic Homilies* の執筆にあたって世俗世界で大きな権力を持つ二人のパトロンを抱えていた。c. 989–c. 992 に成立したとされる *Catholic Homilies* は、Æthelweard からの要請によって執筆が実現した。また、993 年頃～998 年頃に成立した *Lives of Saints* は、Æthelweard とその息子である Æthelmær をパトロンとして執筆されている。Æthelweard は、994 年にイングランドに侵入したヴァイキング軍との交渉役を担った人物でもある。当時 Wessex には、聖職者を含め、スカンジナビアの血を引く人々が多くいたこともあり、Ælfric が北欧に関する情報を当時スカンジナビアに関わる人々から直接的に聞き知っていた可能性も指摘されている (Townend 138)。Ælfric の執筆活動を支えたパトロンの社会的立ち位置とパトロンと Ælfric との関わりを合わせて考慮すれば、*Lives of Saints* や *Catholic Homilies* を執筆した当時、Ælfric と関わりを持つ世俗の有力者に、ヴァイキングと深く関わる人々が多く含まれていたことが推察される。このような社会状況を抱えた Ælfric にとって、作中で侵略者としてヴァイキングを直接的に言及し、いわば「名指し」することは、社会・政治的に慎重を要する問題となっただけではないだろうか。パトロンや自らの社会的立場を考慮する心理が、当時スカンジナビア、あるいはスカンジナビア人を一般的に示す *Dene* や *Denisc* を侵略者、攻撃者として使用することを避けさせたのかもしれない。

2. Wulfstan 作品に見られるヴァイキングへの言及

ここまで Ælfric によるヴァイキングの言及とその特徴を確認したが、同時代に活躍した Wulfstan の作品においても類似した特徴を見ることができる。つまり、Wulfstan が作中でヴァイキングに言及する時、Wulfstan はほとんどの場合で民族名を使用した直接的な言及を避け、代わりに間接的な表現を多用する。Wulfstan は、996 年から London 司教を務めた後、1002 年からイングランド北部の York の大司教を務めている。また、1016 年以降は Cnut の右腕として法文書を起草しており、Ælfric 以上にスカンジナビアの人々や文化と深い社会的関わりを持っていることが窺える。そのため、Wulfstan 作品では頻繁にヴァイキングへの言及が見られるが、その言及は Ælfric と同じく多くが間接的である。さらに、Wulfstan 作品において民族名を使用した直接的なヴァイキングへの言及は、法的・行政的な文脈を持つ法文書に限られるという点も注目し得る。Wulfstan による法文書の中で最も初期のものである *Law of Edward and Guthrum* では、聖職者が支払うべき罰金に言及する一節において、デーン人が支払うべき *lahslit* が、イングランド人が支払うべき *wite* と並列して言及される (*LawEGu* 3.2)。同様の表現は、Wulfstan がキャリアの晩年に Cnut のもとで作成した法文書 *Cnut II* にも見られる。この法文書では、*Law of Edward and Guthrum* と同様の表現が 3 箇所確認され、イングランド人の *wite* に対してデーン人の *lahslit* という構造で民族名 *Dene* が使用されている。このように、Wulfstan が直接的な民族名である *Dene* を使用する際は、法文書の中の行政的な文脈においてであり、26 例確認できる Wulfstan の使用する *Dene* のうち、22 例が引用と同様の文脈で使用されている。これらの例で注目すべきは、民族名 *Dene* が、ほとんどの場合で、イングランド人を示す語 *Engle* との並列で使用されていることである。言い換えれば、Wulfstan は、イングランド人を示す *Engle* と対になる概念として *Dene* を使用する時を除いて、民族名 *Dene* を決して使用しない。Wulfstan 作品において *Dene* は、*Engle* と並列され、*Dene* の *lahslit* と *Engle* の *wite* が常に対照的に示される。これは、Wulfstan が *Engle* と *Dene* の間の行政的な区分を明確に提示しようとするためであり、これらの例では *Dene* と *Engle* という 2 つの民族を示す語が、それぞれの民族の法的権限の及ぶ範囲に明確な境界を示す役割を担っていると考えられる。また、これらの *Dene* は、いわゆるデーンロー地域に居住する人々であり、*Anglo-Saxon Chronicle* が示すような、海の向こうからやってくる侵略者に必ずしも言及するものではなく、Wulfstan が攻撃者や侵略者という否定的な印象を示す語として *Dene* を使用することは全くない。

Wulfstan は、説教作品でもヴァイキングに言及する場合があるが、説教作品では、Ælfric と同じく間接的、婉曲的な表現で彼らに言及する傾向が見られる。例えば、London 司教時代に作成されたと考えられる説教 *WHom 3* には、Wulfstan がヴァイキングによる侵略に言及する最も初期の例と捉えることができる一節が含まれる (*Lionarons* 53)。ここで Wulfstan は、国家を苦しめるヴァイキングを “*ælfpeodige men and utancumene*” (*foreigners and strangers*) と表現し、直接的に民族名で言及することを避けている。この傾向は、Wulfstan の最も有名な作品である *Sermo Lupi ad Anglos* でも同様である。本説教では、ヴァイキングが “*flotmen*” (“*pirates*”) や “*on hæpenum þeodum*” (“*among heathen peoples*”) といった表現で言及され、民族名は決して使用されない。このように、Wulfstan は、Ælfric と同様に、ヴァイキングを *Dene* や *Denisc* といった民族名で名指しすることにはかなり神経質であったと考えられ、Wulfstan のヴァイキングへの言及の仕方には、自身の社会的立場、当時の社会情勢などを踏まえた社会的心理的配慮が働いていると思われる。

結論

本稿では、10 世紀末から 11 世紀初頭にかけてのヴァイキングの言及について、Ælfric と Wulfstan の 2 人の作家に注目して考察を行った。2 人に共通する点は、*Anglo-Saxon Chronicle* の記述とは異なり、当時侵略者としてイングランドへ到来した人々を *Dene* や *Denisc* といった民族名で名指しすることを極力避けているという点である。例外的に民族名を使用する場合、Ælfric ではそれは過去の歴史的記述として示す場合であり、Wulfstan では法文書において法の適応範囲を地理的、法的に明確化する時のみである。いずれも *Dene* 等の民族名が、当時の侵略者と否定的に結びつかない文脈で使用されている。国家を苦しめる侵略者を、民族名 *Dene* で名指しする行為は、*Dene* という名前に民族的、文化的に関わるすべての人々をイングランド人と明確な輪郭でもって区別し、侵略者という否定的印象を付与することになる。Ælfric や Wulfstan の持つ社会的境遇に鑑みると、民族名による直接的言及を避ける 2 人の態度には、自らの社会的状況にうまく言葉を合わせようとする彼らの心理的配慮が表れていると考えられるのではないだろうか。

参考文献

- Townend, Matthew. *Language and History in Viking Age England: Linguistic Relations between Speakers of Old Norse and Old English*. Brepols, 2002.
- Lionarons, Joyce, Tally. *The Homiletic Writings of Archbishop Wulfstan*. D. S. Brewer, 2010.